

高学年用暗唱詩文集（その二）

1

海

高田敏子

少年が沖に向かって呼んだ
「おーい」

まわりの子どもたちも
つきつきに呼んだ

「おーい」「おーい」

そして

おとなも「おーい」と呼んだ

2

子どもたちはそれだけで
とてもたのしそつだった
けれどおとなは
いつまでもじっと待っていた
海が
何かをこたえてくれるかのように

橋

高田敏子

少女よ
橋のむじろつに
何かあるのでしょうね

私もいくつかの橋を
渡ってきました
いつも心をときめかし
急いでかけて渡りました

あなたがいま渡るのは
明るい青春の橋

そしてあなたも

急いで渡るのでしょうか

むこう岸から聞こえる

あの呼び声にひかれて

つもった雪

金子みすゞ

上の雪

さむかるな。

つめたい月がさしていて。

下の雪

重かるな。

何百人ものせていて。

中の雪

さみしかるな。

空も地面も見えないで

月夜の浜辺

中原
中也

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打ち際に、落ちていた。

それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが

なぜだかそれを捨てるに忍びず

僕はそれを、袂たもとに入れた。

月夜の晩に、ボタンが一つ
波打ち際に、落ちていた。

それを拾って、役立てようと
僕は思ったわけでもないが
月に向かってそれはほうれず
浪に向かってそれはほうれず
僕はそれを、袂たもとに入れた。

月夜の晩に、拾ったボタンは
指先に沁しみみ、心に沁しみみた。

心に太陽を持って

フライシュレン

山本 有三 やまもと さん 訳

心に太陽を持って

あらしがふこうと、

ふぶきが来ようと、

天には黒雲、

地には争いがたえなかるうと、

いつも、心に太陽を持って。

くちびるに歌を持って、

軽く、ほがらかに。

自分のつとめ、

自分のくらしに、

よしや苦勞がたえなかるうと

いつも、くちびるに歌を持って。

苦しんでいる人、

なやんでいる人には、

こう、はげましてやろう。

「勇気を失うな。

くちびるに歌を持って。

心に太陽を持って。」

ふるさとの木の葉の駅

坂村
真民 まきみ

この駅で

いつも母が待っていてくれた

駅には赤いカンナの花が咲き

車窓しやせうにそれは近々と迫ってきた

母のいないさびしい駅を

わたしは息をのんで過ぎていった。

小景異情 せうけい (二)

室生
犀星

ふるさとには遠きにありて思つもの

そして悲しくうたつもの

よしや うらぶねて異土かたの乞食いとなるとも

帰るところにあるまじや

ひとり都のゆぶぐねに

ふるさとおもひ涙ぐむ

そのころもて

遠きみやこにかえらばや

遠きみやこにかえらばや

啄木のうた 二首

はたらけど

はたらけど猶わが生活楽にならざり

ちっと手を見る

ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に

そを聴きにゆく

与謝野 晶子 一首

海恋し潮の遠鳴りかぞへては

少女となりし父母の家

金色のちひさき鳥のかたちして

銀杏ちるなり夕日の岡に

若山 牧水 二首

白鳥は哀しからずや空の青
海のをにも染まずただよふ

幾山河超えさり行かば寂しさの
終てなむ国ぞ今日も旅ゆく

壺

おしつゆ
おしつゆ
馬鹿にのんきそつじゃないか
どじまでゆくんか
ずつと磐木平の方までゆくんか

山村 尊海

ねご殿へ

問所 ひさこ

うちの庭は、

あなた方のおへんじょではない。

アリのアパートと

イチゴの芽とで

もういっぱいなんです。

それでも やるっていつのなび

ほかに 場所がないっていうのなら、
ひとつに、

あいさつしたら どうですか。

こんど 泥どろを掘るとこ みつけたら、

水をかけます。

あしからず。